# Microgravity experiment on the collisional behavior of saturnian ring particles

Daniel Heißelmann, Jürgen Blum, Helen J. Fraser, Kristin Wolling Icarus, Volume 206, Issue 2, April 2010, Pages 424-430

#### 名古屋大大学 地球環境科学専攻 M1 藤田幸浩

・土星の環

メインリング ( <u>無数の粒子</u>で構成されている 大部分が氷を主成分とする粒子 (1~10 cm)



NASA/JPL/Space Science Institute

環がもつ特徴的な構造は衛星 – 軌道が乱されることで離心率や や小型衛星による摂動が関係 – リングの厚さが増加

> この乱れを中和するために低速度(~0.5cm/s)の 非弾性衝突が頻繁に起こり、k.e が散逸する

🔶 再び軌道が円形化され、厚さは制限される

土星の環の進化には氷粒子の衝突が大きく関係

## 1. Introduction

これまでの研究

Bridges et al.(1984) — 氷平板への氷球衝突実験

衝突速度、ターゲット表面の霜の量が 増加するにつれて反発係数が減少

Higa et al.(1996,1998) Supulver et al.(1995) 氷ターゲットへのサイズの異なる 研磨した氷球の斜め衝突実験 氷球の衝突実験

その他にも、理論・数値シミュレーションが数多く行われてきた 本研究では

> 土星環の粒子間で起こる低速度衝突の研究に対して 2つの新しい実験手法を検証する

- Parabolic-flight experimentDrop-tower experiment

# 2. Experimental setup

<Parabolic-flight experiment> 氷球の二体衝突を低速度で行う 微小重力

> 重力加速度 - 0.0ⅠG₀ 程度 継続時間 - 22 s

> > ※G₀:地上での重力加速度



#### ・氷球試料

蒸留水を型に入れて冷却 サイズ – 15 [mm] 六方晶氷

・観察



# 2. Experimental setup

<Parabolic-flight experiment> 氷球の二体衝突を低速度で行う 微小重力

> 重力加速度 - 0.0ⅠG₀ 程度 継続時間 - 22 s

> > \*G₀:地上での重力加速度



#### ・氷球試料

蒸留水を型に入れて冷却 サイズ - 15 [mm] 六方晶氷

・観察



2. Experimental setup
<Drop-tower experiment>
ガラスビーズの低速度多体衝突<br/>微小重力
( 重力加速度 - 10<sup>-5</sup> G<sub>0</sub>程度<br/>継続時間 - 9 s

・試料:ガラスビーズ (10mm) \* Iset - 50個
 試料を両端にセット
 ↓
 長方形のチャンバーに注入 (~10 cm/s)
 150 × 150 × 15 mm<sup>3</sup>

・観察

高速度ビデオカメラで記録:II5 fps ※他に2つのカメラで概観を撮影



Bremen Drop tower



#### 3. Results < Parabolic-flight experiment >



上下画像間の角度差:48.8°

ビームスプリッターで捉えた2組の画 像から三次元のサンプル座標を生成 衝突前、衝突後の速度:  $\nu \nu'$ 🔶 反発係数:ε 衝突パラメーター:  $\frac{b}{R}$  $R = r_1 + r_2$ r2

2010年4月22日木曜日

### 3. Results < Parabolic-flight experiment >



・衝突パラメーターと反発係数の関係 (相関係数)

$$r_{b/R} = \frac{\sum_{i=0}^{n} (\varepsilon_i - \varepsilon) \left(\frac{b_i}{R_i} - \frac{b}{R}\right)}{\sqrt{\sum_{i=0}^{n} (\varepsilon_i - \overline{\varepsilon})^2} \cdot \sqrt{\sum_{i=0}^{n} \left(\frac{b_i}{R_i} - \frac{\overline{b}}{R}\right)^2}}$$

$$r_{b/R}^2 = 0.10$$

線形的な相関はあまり見られない



同様に線形的な相関は あまり見られない

#### 3. Results < Parabolic-flight experiment >



2010年4月22日木曜日

3. Results < Drop-tower experiment>

・ビーズ速度の積算個数分布



3. Results < Drop-tower experiment>

・ビーズ速度の積算個数分布



## 3. Results < Drop-tower experiment>



・全体の平均粒子速度の減衰

 $\varepsilon(v) = const$ 

Haff (1983)

熱運動速度が0の粒子流における粒子 速度(二乗平均平方根)の時間変化  $v(t) = \frac{1}{\frac{1}{v_0} + (1 - \varepsilon) \cdot n \cdot \sigma \cdot t}$  $\begin{cases} v_0 : \lor - \varkappa \rangle \cdot n \cdot \sigma \cdot t \\ v_0 : \lor - \varkappa \rangle \cdot n \cdot \sigma \cdot t \\ n : & \forall r \rangle \cdot d \\ \sigma = 4\pi r^2 : & \text{断面積} \end{cases}$ 

## 3. Results < Drop-tower experiment>



2010年4月22日木曜日

## 4. Conclusion

本研究では、微視的な氷物質個々の衝突を研究するために新たな 2つの手法で実験を行った

<Parabolic-flight experiment>

- 相対速度 6cm/s 以上の2体衝突に適している  $\frac{b}{R} = 0 \sim 0.5$  (near-central impact)
- 反発係数と衝突パラメーター、相対速度との相関はあまり
   見られなかった
- 反発係数:  $\overline{\varepsilon} = 0.45$  、  $\varepsilon = 0.06 \sim 0.84$

<Drop-tower experiment>

- 1cm/s より小さい相対速度での多体衝突を達成できた
- 速度の時間進化は *ε* =0.64としてHaff(1983)の式で
   フィッティングできた
- 得られたビーズの速度分布は予想される土星環の速度分布に近い